



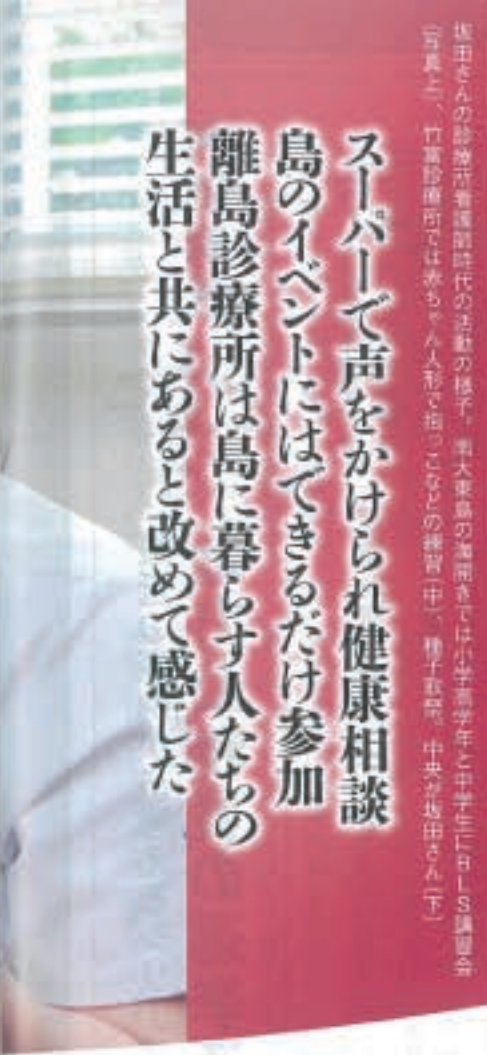
伊藤隼也
が行く
Vol.49



高山さん
高山さんの診療所を訪問した時代の活動の様子。座間村島を去る前に開かれたお別れ会(写真上)。米舟のお祝いに診療所を訪問する保健師と一緒に手紙(写真中)。パロウウィーンの演奏をする妙性園児と高山さん(写真下)。



下地さん



スーパードで声をかけられ健康相談
島のイベントにははてきるだけ参加
離島診療所は島に暮らす人たちの
生活と共にあると改めて感じた



坂田さん

Ito Naoya
が行く
Vol.49

しまナース

島民を守る看護師を 私たちが支える

伊藤隼也は今回も沖縄県へ。沖縄県立南部医療センター・こども医療センターを訪問し、離島で多忙な業務を行う診療所看護師を支える「しまナース(離島医療支援看護師)」を取材しました。

離島は医師一人看護師一人業務が多様で休めない問題も

伊藤 沖縄といえば、やはり島が多いという印象があります。今回は、沖縄県病院事業局県立病院協会の「離島医療支援看護師」、通称「しまナース」の取り組みについて取材にきました。まずは、離島をめぐる医療がどうなっているのか、教えていただけますか。

下地 沖縄県には160あまりの離島があり、23カ所に離島・へき地診療所があります。内訳は、県立附属診療所が16カ所、町立診療所が7カ所です。県立は親病院が医師と看護師を派遣しています。また、県立の大学(沖縄県立看護大学)では、高し看護を学ぶ意義がありますので、それはやっぱり沖縄らしい特色なのかなと思います。

伊藤 離島診療所は、やはり医師一人看護師一人の最小単位で動いているという感じですか？

下地 その通りです。伊藤さん、かなり幅広い業務を一人で受け持たなければなりませんよ。

下地 はい。急性期から慢性期までの医療や看護、在宅介護家族の支援、終末期のケア、地域の機関との連携や調整にも関わっています。

伊藤 それはたいへんだ。高山さんと坂田さんは離島診療所の看護師を経験されていると聞きましたが、振り返ってみていかがでしたか？

高山 病院では原則、チーム医療なので、困ったことがあれば誰かに相談できます。そこで、的確な答えをもらえたり、情報共有ができたりのわけで行きます。しまナースは現在2人体制で動いていて、合わせると年間300回ぐらいの要請があります。

伊藤 けっこう多いですね。今日は坂田さん、高山さんの二人ともいらっしゃるから、要請はなかったのですか？

坂田 いえ。現在は私ともう一人、加藤美の2人で活動しています。高山は去年までしまナースをしていましたが、今は違う部署で働いています。加藤は要請があつて、今、西表島の診療所で活動しています。

伊藤 高山さんや坂田さんは、診療所看護師を経てしまナースになったわけですが、そもそもなぜ離島診療所の看護士が支える必要があるのでしょうか？

下地 沖縄振興特別推進交付金を活用して、平成25年度から始まりまして、離島で働く看護師の業務を代行病院間の垣根をなくして派遣

伊藤 そのしまナースとは、どんなシステムなのでしょうか？

坂田 離島診療所で働く看護師が休みをとるときに、その業務を代行するのが主な役目です。

下地 現在、県立の離島診療所は5つの県立病院が親病院となつていますが、親病院に関係なく、診療所から要請があれば、しまナースが稼働します。

伊藤 病院間の垣根をなくした活動というのがいいですね。年間どれくらい

坂田 一つの診療所に年間3回ほど

沖縄県立病院医療センター 小児科医療センター
入道研究員
下地和枝さん
沖縄県立病院事業局 離島医療支援看護師(しまナース)
坂田真紀さん
診療科内科・心療内科外科科
高山鈴華さん
1988年、高立看護専門学校卒業後、県立病院へ就職(胃腸科、産科、中絶科勤務)。沖縄県立看護大学大学院の看護学修士課程を修了後、しまナースを専任。現在は沖縄県立南部医療センター・こども医療センターの入道支援業務の統括として勤務。
愛知県の看護学校を卒業後、県内の病院で勤務。29歳で助産師免許を取得し、産科病棟で勤務。37歳で竹富島へ移住し、竹富町立竹富診療所で6年間勤務。その後、県立南部医療センター・こども医療センターに就職し、2017より沖縄県立病院事業局医療支援業務統括、離島支援看護師として勤務。
平成16年、沖縄県立看護大学卒業後、県立病院へ就職(南都病院、八重山病院、南部医療センター・こども医療センター)。2013年、県立南部医療センター・こども医療センターに所属。2016年、しまナースを専任。現在、県立南部医療センター・こども医療センターに勤務。

診療所では看護師の役割は多岐にわたる その看護師が疲弊しないよう 業務や精神的な面で支えている しまナースの存在はとて大いと思う

看護師になったのでしょ。

富山 私は県立の看護大学で島しよ看護を学んで、興味を持ったのがきっかけです。座間味島の離島診療所で2年間ほど診療所看護師をしていました。

離島診療所の勤務が終わった後に、離島支援のほうに回ってみたいかという打診があり、たった2年でしたが、この経験が他の診療所の看護に生かされたらいいなと思って、お受けしました。

伊藤 座間味ですか。何度か行きましたが、昔の沖縄がそのまま残っている、いい高ですよ。坂田さんは？

坂田 竹富島にある町立の診療所に5年間いました。ただ、私の場合、当時はあまり離島医療に対して強い思いはなかったです。以前、竹富島に旅行したときに「キレイなところだなあ」と感動したことを思い出して、行ってみようかなと……

伊藤 旅行がきっかけですか、いいですね。僕は、そうやって離島診療所に興味を持ってくれる看護師さんって、潜在的にはもっといる気がするんです。坂田さんはいいモデルになるんじゃないかな。それで、診療所を経験した後

に、しまナースにならないかと打診されたわけですね。

坂田 はい。サポートする側になりました。と思う、引き受けました。

生活の中に医療や看護がある 島民を守るのが診療所看護師

伊藤 離島診療所はどうでしたか？

富山 赴任したばかりの頃は、一人で何もかもやらなければならぬことにとても責任感を覚えました。オンコールで夜間でも呼ばれるので、緊張して深く眠れなかったです。

伊藤 島民の皆さんは温かく迎えてくれましたか？

富山 1カ月ぐらいたった頃から、家に呼ばれて夕食をこちそうになったり、道で声をかけられるようになったりしました。私からも、島のイベントにはできるだけ参加するなど、島の人と関わるきっかけを作りました。

伊藤 そうして、徐々に距離が近くなっていったのですか。

富山 今は鮮明に覚えているんですが、島のスーパーで声をかけられて、健康について相談されたことがありました。

「血圧が高いみたいだけど、どうしたらいい？」とか、「ケガしたんだけど、診療所に行ったほうがいい？」とか、ちよつとしたことなんです。だけど、島の人から必要とされる存在になったんだなって思ったから、モチベーションが上がりました。

伊藤 そういふ日常だと、看護に対する考え方も変わったのでは？

富山 変わりました。生活のなかに医療や看護があつて、患者さんや家族と一緒に考えながら、治療や介護をしていくという経験は、とても勉強になりました。保健師の資格も持っているので、地域に向かうことには抵抗がなかったんですが、診療所にいた2年間は、とても充実していました。

坂田 私も、島の人たちから離島での医療とはどういうものか、学ばせてもらいました。島民の方がおっしゃった言葉が今も心に残っています。

伊藤 どんな言葉ですか？

坂田 「同じ保険料を払っているのに、どうして離島だけがガマンしなきゃいけないんだ」と。医療格差を目の当たりにして、島民を誰かが守らなきゃいけない、それが今は私なんだと強く意識するようになりました。

伊藤 疑問点や不安に思うことが出てきたときは、どうしていましたか？

坂田 町立の診療所は親病院がないの

で、相談できるところが少なくて、知り合いになった他の離島診療所の看護師に電話で聞くことが多かったんです。あとは医師と二人で試行錯誤しながらという感じでした。

診療所看護師同士はLINEやICT(WEB会議)でつながる

伊藤 離島診療所を経験した看護師さんからみて、診療所看護師を支えるしまナースの存在は大きいですか？

富山 大きいです。私が離島診療所に赴任したときには、制度が立ち上がつていて、不安なときに相談相手になってもらえました。親病院に聞く前に、しまナースに相談したこともありましたが。

伊藤 お二人は、しまナースとして診療所看護師を支える側に回ったわけですが、どうですか？

坂田 いろいろな離島診療所をみる機会ができたことで、診療所によってまったく違うことがわかりました。例えば、検査機器や検査キットにしても、比較的新しいモノを導入しているところもあり、さまざまなです。例えば、以前、ある離島診療所で交通外傷の患者さんの治療に関わったのですが、バックボードがなかったんです。

伊藤 本当ですか？

坂田 その後、親病院に連絡して手配をしてもらえました。

伊藤 それはよかったです。診療所看護師への支援という部分ではいかがでしょうか。

富山 今は診療所看護師同士のネットワークもできていて、私が離島診療所にいたときよりも、スピーディに情報共有ができるようになっていました。そうしたネットワーク作りにも、私たちが関わっています。今はLINEでつながっていて、簡単に画像を送れますし、WEBで症例検討もしています。

下地 診療所看護師一人で問題を解決することが難しいとの声を集め、平成28年度10月からICT(Information and Communication Technology)を利用した症例検討会を行っています。ICTは、沖縄県保健医療部遠隔医療センターのVCBEミーティングネットワークを使用しています。ICTでの会議は、WEB会議と呼ばれていて、月

1回、開催しています。その会議で症例の検討やその他看護を実践する上での課題が話し合われるので、診療所看護師が互いに支えあうようになり、不安の解消につながっていると思います。

実現していない町立への派遣 しまナースの定着が課題

伊藤 しまナースのシステムはとも先駆的な取り組みだと思えますが、さらに表のミッション、業務の代行とは別に、裏ミッション、というものがあつて聞かれています。

下地 その一つが、診療所看護師をつなぐネットワーク作りです。ほかにも診療所看護師の業務改善のために、Aという離島診療所がよい取り組みをしているから、それをBやCの診療所にも取り入れるなど、そういった情報発信や指導的なこともしています。

伊藤 離島診療所の「質」を上げる取り組みですね。素晴らしいです。一方で、島には島の文化があり、診療所の在り方も島によって違つたりもします。そこを勘案しながら、質を高めていくのは、たいへんな作業だと思えます。

富山 確かに、自分より離島診療所の経験が長いベテランの看護師さん多いらしいです。そういう方に「こんなやり方に変えてほしい」とはなかなか言いにくかったです。朝晩にメール

を入れたり、電話をかけたりのなどしました。また、病院によって採用している物品も違うので、その垣根を越えるのは難しかったですね。

伊藤 気配りも大事ですね。

下地 今はそんなことはありませんが、始めた当初はいろいろありました。

伊藤 今後の課題はありますか？

坂田 県立の離島診療所はいいのですが、町立の離島診療所にはしまナースを派遣できないんです。それを解決したいと思っています。

上に病院があつて、病気や不調と付き合ひながら暮らしている島民のみならず、支える存在。やりがいがあります。あまり気負わないでほしいですね。

伊藤 写真家としていい写真を撮ろうと、これまで沖縄の島々には数え切れないほど出かけました。島では不便な環境や天気にも悩まされましたが、島の人たちの何気ない日々のやりとりや、独特な時間の流れの中で、僕自身が癒されていることに気づき、いつしか沖縄の島々が大好きになりました。離島での暮らしは人を癒す力を持っています。まさに看護の原点だと思えます。診療所看護師やしまナースの活躍をこれからも応援しています。



伊藤準也が行く診療センターの様子。

PROFILE

伊藤準也

(いとうしゅんや)

医療ジャーナリスト
写真家
医療情報研究所代表

患者中心の医療を実現するため医療ジャーナリストとしてテレビや雑誌などのメディアで活動中
ホームページ shunya-itv.jp

取材に同席した石田議員と一緒に記念撮影。インタビューは開始前かながら撮影。